

2020.10.3

紙つぶて



水島 広子

## 恐怖と癒やしの記憶

将来精神科医になり、トラウマ(心的外傷)を専門とするとは全く思っていなかった大学の医学部六年生のとき。私は主に北欧を旅していた。若い女性の一人旅なのでリスクはつきものとはいえ、フィンランドで白昼堂々レイプされそうになったときはギョッとした。何とか突き飛ばして近くのタクシー会社に助けを求めたが、本気にしてくれない。仕方ないので列車で一駅乗り、駅近くのホテルに逃げ込んだ。そういうときに限って、ホテルはフィンランド語かドイツ語しか通じない。かろうじて宿泊する段取りができ、少しくつろぐとサウナに行ってみたら、なんと男女の別もなく、先客はほぼむき出しの男性一人ではない

か! すぐに飛び出したのは言つまでもない。

翌日宿を出て列車で北上していたら、車中で一人旅同士の老若男女から声をかけられ、みんなで学生寮に泊まることになった。私はおばあちゃんと同室。翌日にはすっかり元気を取り戻した。

実はこの実話には、トラウマに関するすべてが含まれていると思う。私の男性恐怖症がより深刻にならないために、最も重要なのが「周囲からのサポート」であり、「日常」なのである。学生寮と一緒に簡単な調理をして世間話をしてくれたおばあちゃん(国籍は忘れたけれど)に感謝。男性恐怖症は再発しないですんでいるし、人間不信にもなっていない。

(精神科医)